福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

低圧都市ガス用クランプオン超音波流量計の開発

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹内, 恵子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/10399

福井大学初等教育研究　2017，第4号，pp.59－66

報告

附属幼稚園と連携した教員免許状更新講習
― 受講者アンケート・レポートからみた意義と課題 ―

福井大学教育学部　竹　内　恵　子

平成24年度から教員免許状更新講習「幼児期の発達を理解する」を福井大学教育学部附属幼稚園と連携し講習会場を幼稚園として実施してきた。附属幼稚園と連携して行う教員免許状更新講習の意義と課題について、平成29年度講習受講者へのアンケート、レポート、評価書を分析した。受講者にとっては他園の保育を参観する機会、他園職員と学びあう場、幼児期の発達を学び直す場となり、附属幼稚園にとっては自園の研究公開の機会となりうることがあきらかとなった。

キーワード：教員免許状更新講習、附属幼稚園、連携、幼稚園教諭

1．はじめに

平成19年6月の改正教育職員免許法[1]の成立により、平成21年度から教員免許更新制が始まった。福井大学（以後「本学」）においても同年度より必修領域講習と選択領域講習（平成28年度以後は必修領域･選択必修領域･選択領域の3領域）が開講されてきた。

平成24年度から主に幼稚園教諭・小学校教諭を対象に毎年1回、本学部附属幼稚園を会場として「幼児期の発達を理解する」と題した教員免許状更新講習（一日6時間講習）を実施してきた。

受講者にとって実践的な講習となるよう、実際の保育を参観してもらう場を提供したいと考えていたところ、附属幼稚園から、園の教育内容や研究を地域の保育者に周知していく機会として協力可能と承諾を得たことから、附属幼稚園教職員に学外協力者となっていただき、附属幼稚園での講習開催が実現した。

平成24年度開始当初から、附属幼稚園の保育参観と参観内容をもとにしたグループ討議、園の研究内容の紹介、幼児期の発達に関する講義、という多角的な学習方法を組み込んだプログラムにしてきた。受講者の意見や附属幼稚園の状況を鑑み、日程やプログラムの見直しを毎年行ってきた。

全国的に見ると、開催されている教員免許状更新講習（平成29年度）のうち、附属小学校・中学校の授業参観が組み込まれている講習は複数あるが、附属幼稚園（特別支援学校幼稚部を除く）の保育参観を組み込んでいる講習は本学を除いて1講習のみであった（教員免許管理システム運営管理協議会[2]）。もちろん各附属幼稚園は教員免許状更新講習と関係なく公開保育や研修会等を開催しており、幼児教育の研究園・モデル園として地域への発信は行われている。よって教員免許状更新講習を附属幼稚園と連携して行うことは、研究園・モデル園の発信機会をさらに増やすことになると考える。

本講習が受講者にはどのような学びになっているのか、附属幼稚園にとってどのような意義があるのかを検討し今後の開催に向けて考察する。

2．目的

附属幼稚園と連携した教員免許状更新講習の意義と課題について検討する。

3．研究方法

平成29年度に実施した教員免許状更新講習「幼児期の発達を理解する」（以下本講習）受講者10名の事前アンケート、レポート、免許状更新講習評価書を分析する。

本研究の目的、アンケート・レポート等をデータとして使用することについて受講者へ文書及び口頭で説明し書面で了承を得た。

4．講習について

4-1.　講習の目的

本講習は「保育参観・グループ討議・講義等の多角的学習形態を組み合わせ、自らの保育をふりかえるとともに、幼児期の子どもの発達と教師の援助について理解を深める」を目的としてアナウンスした。

4-2.　講習日時及び会場

平成29年5月24日(水) 9：00 ～ 16：00　福井大学教育学部附属幼稚園（以下同園）で実施した。

同園は3、4、5歳児各学年2学級、定員140名の幼稚園である。職員は、園長・副園長を除いた教諭（講師、養護教諭含む）10名である。

本講習は同園の「ふようラウンドテーブル[(注1)]」開催日に合わせて実施した。当日のプログラムを図1に示す。

4-3.　受講者数

受講者数は10名（定員10名）。園内での講義場所の確保等から定員を決定した。

図1.　当日プログラム

4-4.　講習内容

本講習受講者は、グループ討議までふようラウンドテーブル参加者と同じプログラムである。

各プログラムの内容は以下のとおりである。

【保育参観】

附属幼稚園の保育は2部構成となっている。前半「好きな遊びの時間」は、園内のどこで誰と何をして遊んでもよい。後半の「みんなの時間」はクラス単位で活動する。これは子どもの主体性を重視した保育形態として同園が行っている。

講習当日もこの形態の保育を公開し、受講者は園内自由に参観してよいとした。

保育参観前にオリエンテーションとして、同園の保育形態や研究内容等を簡単に説明してから保育参観とした。

【全体会】

同園研究主任による研究発表をふようラウンドテーブル参加者とともに聴講する。事前に資料を受講者に送付し、園のめざす保育や研究内容について知識を得て受講してもらうようにした。

【ラウンドテーブル（グループ討議）】

1グループ数人のグループに分かれ、保育参観をもとに子どもの様子や教師の援助・環境構成について討議する。各グループには、本講習受講者、同園職員、ふようラウンドテーブル参加者、同園研究助言者・協力者が必ず入るよう事前にグループ分けを行った。

討議は同園の平成29年度研究主題「つながり合って遊ぶ子どもたち[3)]」の視点で行う。保育参観中に見えた「『つながり』のある子どもの姿」と「その『つながり』を支える教師の援助や環境構成」を各自が付箋紙に書き込み、グループ討議の際に持ち寄って討議をすすめるようにした[4)]。

【講義】

講義は幼稚園の一室で、受講者10名のみを対象とし、筆者（小児科医）が行った。

前半は発達障がいを中心とした育ちの気になる子どもと医療の関わりについて、後半は感覚統合の視点から子どもの特性や発達のとらえ方と幼稚園・保育園での援助方法を具体例をあげて講義した。講義後レポートを課した。

5．結果

5-1.　受講者の属性および受講理由

受講者10名の属性は表1のとおりである。

受講者年代は偏りなく、全員女性である。所属機関の設置形態は私立が多いが、幼稚園・保育園・認定こども園と様々である。職種は青少年教育施設の主任1名を除く9名が幼稚園教諭・保育教諭・保育士であり、いずれも就学前教育・保育施設で保育者として勤務している。所持免許は、幼稚園免許（一種または二種）所持者が多い。10名中8名が幼稚園・保育園・認定こども園でクラス担任をしている。

受講理由（複数選択可）は、「都合のよい日程だから」3名、「場所が便利だから」1名、「内容に興味があるから」8名、未記入1名であった。

表1.　受講者属性

受講者年代 (全員女性)	30代	3名
	40代	4名
	50代	3名
所属機関の 設置形態	公立幼稚園	2名
	私立幼稚園	1名
	私立保育園	3名
	私立認定こども園	3名
	その他(青少年教育施設)	1名
職種	幼稚園教諭	3名
	保育教諭	2名
	保育士	4名
	主任	1名
所持免許・資格*)	幼稚園一種	2名
	幼稚園二種	5名
	小学校一種	4名
	中学校・高等学校教科	2名
	保育士	1名
担任クラス	2歳児	4名
	3歳児	1名
	5歳児	3名
	担任なし(主幹教諭)	1名
	担任なし(青少年教育施設)	1名

*) 保育士資格は所属機関の設置形態からあきらかに所持と考えられても本人記載のないものはカウントしていない。

5-2.　事前アンケート

保育参観前のオリエンテーション時に事前アンケートを記入してもらった。

研究集会等で附属幼稚園の保育を参観した経験の有無及び、参観経験者には参観回数を尋ねた。10名中2名が経験あり、参観回数はそれぞれ8回、10回であった。

また、附属幼稚園に対する現時点での印象を自由記述

で記載してもらった。

表2は、10名の記述内容を項目毎にまとめたものである。◎は参観経験者である。

表2.　附属幼稚園の事前の印象

【園児について】 ・子ども達が自由にのびのび遊んでいる ・しっかりした教育のなかで学んでいるのでしっかりした考えや行動ができる ・子ども達は能力差がないように思う ・行儀のよい子が多い ・入試があるので優秀な子どもしか入れない ・お金持ちの子どもしか入れない
【保育について】 ◎幼児が主体的に活動している ◎みんなの時間でのふりかえりが遊びの広がりや深まりに活かされている。ふりかえりの手段(画像やホワイトボード)が工夫されている ・一日の終わりにふりかえりをして次の活動につなげている ・教育面に力を入れている ・設定保育が中心 ・幼小連携がきちんとなされている ・研究された教育内容である
【保育環境について】 ◎子どもがやりたくなる環境を整えている ・子どもがやりたくなる環境を整え、考えて遊べる教材が多い ◎子どもの興味関心に本物を使って遊べるよう工夫されている ◎オープンな保育室が活かされているがクラスが落ち着かず難しそうと感じることがある
【教師について】 ◎保育について保育者間で話し合っている ・保育者どうしの思いを一致させている ◎幼児の遊びを分析し活動を予想しながら環境構成をしている ◎子どものつぶやきをとりあげて気持ちの変化や心の動きをとらえ、関わりにつなげたりよりそっている ◎個々の学びを細かく記録し翌日の遊びにつなげられるようにしている ・指導案の書き方が上手。書くための勉強をしっかりしている ・発達をしっかりとらえながら個々、集団のねらいを持ち具体的に実践、ふりかえり、研究している ・研究熱心である ・子どもひとりひとりをすごく研究している ・長年の経験を積んでいる人しか職員になれない ・系統だった研究がされている
【保護者について】 ・教育熱心な保護者が多い ◎登降園は送迎なので話をしたり聞いたりできるが大変な部分もありそう
【その他】 ・子ども達を大学が研究対象にしている

5-3.　レポート

講義終了後のレポート項目は、(1)保育参観(2)グループ討議(3)講義(4)附属幼稚園に対する印象の変化(5)講習方法の5項目である。

(1)保育参観

保育参観を通して理解したこと、考えたことを自由記述してもらった。項目に分け表3にまとめた。◎は参観経験者である。

保育参観は他者の保育を客観的に保育を見ることができる機会である。今回の保育参観は受講者が参観したいところを自由に参観するという方法をとったので、各自の保育参観に関する記述内容は、様々な場面がとりあげられていた。しかし、参観後のグループ討議のテーマ「つながる」を参観のひとつの視点としてオリエンテーションで提示しておいたこともあり、子どもどうしのつながりや遊びのつながり（連続性）について記述した受講者は多かった。

また「みんなの時間」が翌日の遊びにつながったり子どもどうしのつながりになることへの気づきやふりかえりの重要性について述べられていた。

保育や環境構成については、子ども主体で遊んでいることへの注目や遊びを支えるための声かけや環境構成への言及があった。

子どもや教師の様子を見ながら自分の保育や自園の環境をふりかえる記述もあった。

幼稚園・保育園等の幼児教育経験のない小学校以上での教員経験者は、幼児期を終えた子ども達を受け入れる小学校の立場から保幼小連携の重要性について述べていた。

表3.　保育参観

【園のテーマ「つながり」について】 ◎「つながり」を意識して保育参観した ・研究テーマ「つながり」を念頭に見学した ・年中～年長それぞれの考えを言いあっている場面をみて考え方の違いや成長を考えた ・異年齢でどんな遊びをするのか期待してきた。自園は限られた時間で異年齢で、どうつながっているのか不安に思っていた。子どもの会話でも異年齢の声かけがあったり、危ないのでダメといいがちだが年上の子を見て学んでいるのだろう ・5歳児サッカーで仲間との集団性の高まりを感じた ・子ども達だけでの会話が多く見られたことに驚いた。必要な時に先生が入ったり、近くで見守ったりして「つながり」を大事にした保育実践を見ることができ勉強になった ・子どもどうしでつながるのが難しい年少も教師が一緒になって遊ぶことで段々できるようになり成長していくのだと思った ・色水遊びで、この花からこんな色水になるんだと知り、それを周りの子に伝え、その子も作りたいとつながっていく場面を見た ◎できた色水を見せ合い比べたりしながら言葉をかわし

楽しさを共有。人とのつながりを感じた
・3～5歳の発達の特徴が遊びの様子やつながり方からよくわかった。幼児の発達を理解することで小1に入学してくる子ども達の関わり方、つながりに大変参考になった。保幼小の連携を密に行うことの大切さを感じる
・つながるとは奥深いと感じた

【遊びのつながり（連続性）・ふりかえり】
・毎日同じ設定をつくることで遊びに連続性ができ、今日できなかったことも明日できるというのがよい
◎「みんなの時間」で友達や教師に伝えて認めてもらえた喜びが明日の遊びにつながっていくと感じた
・年長の「みんなの時間」で子ども達が発表に意欲的だった。教師がテレビで木の実を拡大したり全員で共有できる方法をとっていたのがよかった
・年少で遊びの時に出てきたカエルの変色を後で絵本でとりあげていた。遊んでいた子だけでなく他の子にとっても変色の学びができたと思う
・ふりかえりは大事と思う。自園でもとりいれたい

【保育・環境構成】
・自分がしたい遊びを選択して遊びこめる環境があるからこそ、探究心が高まり発見できたり工夫したりと育ちが大きくなっていると感じた。遊びこめる環境を整えるには時間や手間もかかるがおしまず実践したい
・貸し借りでケンカになりそうになっていたが「後から貸して」「一緒に使おう」など自己調整しながら遊びを続けたり工夫して作れるよう用意してある環境は学びになった
・いろんなままごとの材料がそろえてあり遊びやすいようにしてありよかった
・年齢に応じた部屋の環境設定もよかった
・図鑑や入れ物などの用意で、子どもがひとりで、友達と一緒に観察したり調べたりできるのだろうと思った
◎自園でも色水遊びが盛り上がっているところなので附属幼稚園職員の声かけや援助、環境構成を参考に保育に活かしていきたい
◎興味関心を引き出し伸ばしつなげひろげていくための環境を整えること、そのなかで保育者がどのように声かけ、よりそい、共感していくか色々な場面で考えさせられた
◎自園では日々の予定や行事との関係でここまで十分な時間がとれていないのが現状。発達をよくみて一人一人に合ったクラス全体に合った環境を考えていかないといけないと感じた
・保育士が一方的に発信する遊びは長続きしないが、好きな遊びをしているため遊びこんでいる子どもが多かった
・気がかりさを持つ子にとってはその子らしさを十分に発揮できる場であると思う
・各所に大人がいて子どもの様子を把握していたこともよかった
・トラブルがとても少ないことに驚き、環境を整える大切さを改めて感じた。自由のなかにこそ集団の良さが出てくると思う。しかし保育士の援助は大切でさりげない言葉かけや道具の設定など、自分ならどうするかと真剣に考える機会になった

(2)グループ討議

グループ討議を通して理解したこと、考えたことを自由記述してもらった。項目に分け表4にまとめた。◎は参観経験者である。

討議は園の研究テーマである「つながり」を中心に行ったが、同園職員がグループ内に入るようにしたことで研究テーマ以外についても同園の保育内容や教師の意図を職員から直接聞いたり確認して、同園の保育理解の深まりがあった。また自分の保育実践へ活かそうという記述もみられている。

さらに、ふようラウンドテーブルの参加者、助言者・協力者が各グループに入り、職種（大学教員、指導主事、附属学校教員等）や経験年数（園長、主任、担任保育士等）が混在するグループを編成したので、同じ保育場面を見ていても異なる解釈があり、その意見を聞きあうことのよさを述べた受講者が多い。各自の保育実践のふりかえりや視点のひろがりを述べている受講者もあった。

表4.　グループ討議

【保育について】
・保育は個人の力だけではできず、複数の保育者の目で見ることで子ども達ひとりひとりの良さ、育ち、課題、集団性なども見えてくる
・つながりは真似から始まることが多く、同じ遊びを平行遊びで楽しむなかにちょっとした働きかけでその遊びにつながりが出てくることを改めて感じた
・小学校以後しか知らない私にとって年齢なりに遊びのなかでつながりを感じる場面があり驚いた

【附属幼稚園の保育について】
・色水遊びの背景（色が出やすい花の用意、木の実を皆で食べる等）を聞き、ただ自然を増やすだけでなく遊びに役立つものを育てていると思った
・この環境だから子どもが花や虫の名前をよく知っているんだとわかった
◎たくさん言葉をかわしながら遊んでいたところに注目した先生が多く附属幼稚園の幼児の語彙力の豊かさが素晴らしいという意見が多かった
◎各年齢の保育者が子どものつながりをどのように支え引き出しているか話し合った。年齢に応じて言葉だけの支え、よりそい、知識欲を満たす声かけだったりと柔軟な対応をしていることを改めて感じた
・附属幼稚園の先生の話が聞けたのがよかった
・時間があればもう少し附属幼稚園のことを聞けるとよかった

【自らの保育への参考】
・自園でも子どもの様子、目標、ねらい、エピソード記録などを持ち寄り話し合うことで保育がより深まるだろうと思った
・他園のことを聞いて参考になるところを取り入れたい
・附属幼稚園の教師の言葉のかけ方や内容を参考にしたい
・保育士の関わりの大切さをより実感し、自分もその場を見る目をもっと深めていきたいと思う
・ひとつの場面について語り合うことで様々な対応の仕方があることを改めて感じ、対応ひとつで子どもの反

応も変わってくるので、自分の関わりや環境設定を丁寧に行っていきたい。
・仕事をする上で子どもが好きという気持ちを大切にしていきたい
◎つい言葉をいそぎ結果をいそいでしまうことがあるが、別のゴールに進んでもそこに何かの学びがあったと読みとることが大切なんだと思った
◎異年齢が主、少人数の園といったその園に合わせた保育者の支援も必要と感じた

【グループ討議の意義について】
・グループ討議は初めてだった。子どもの様子をいろんな角度から見て感じて話し合える場がありおもしろかった
・自分が見ていない子どもどうしのつながり、子どもと先生のつながりの話を聞くことができた
・ひとりでは見きれなかったことなどを聞き、子ども達の会話のなかには大きなつながり、学びがあるのだと実感した
・いろんななかでがんばっている保育者の話は学びになった
・メンバーの視点の違いを感じた
・立場が少しずつ違うメンバーだったので、それぞれの立場からみた「つながり」の考えを聞かせてもらい、いろんなところで役立つと感じた
・他の先生から子どものつながりを聞かせていただきよかった
・自分と違った視点での感想を聞くことで子どもを見るときの幅がひろがっていけたような気がした
・他園の様子や工夫も知ることができ、学校でも取り入れるといいなということも見つかった
◎同じ色水遊びを参観していた人がいて、幼児どおしの関わりや教師の援助など意見交換することができた。正解はわからないがいろんな意見を聞くことができ参考になった

(3)講義

担当講師による講義を通して理解したこと、考えたことを自由記述してもらった。項目に分け表5にまとめた。◎は参観経験者である。

講義は、医療からみた乳幼児期の発達障がいのとらえ方や医療ができることについて話した。育ちの気になる子どもを実際に保育している受講者もあり、あらためて発達や特性の見方や関わり方を考える機会になっている。医療と保育の連携についても述べられていた。

また感覚統合に関する講義では、保育者が意識せずに提供している遊びや毎日の生活動作を感覚統合という観点から見直すとどういう解釈ができるか、教材や環境設定をどのように考えるかについて話した。ふだんの保育や環境構成をあらためて考え直す機会になっていた。

表5.　講義

【発達障がいについて】
・発達障がいの子どものとらえ方を知ることができてよかった。視点をかえてのサポートの大切さを実感した
・気になる行動には何らかの原因があるので少しの環境変化や対応でラクにしたあげられるならしてあげたいと思った
◎発達障がいが持つ特性を保育者として理解し、よりよい支援につなげていくことが大切と思う
◎二次障がいを防ぐためにも周りの大人がしっかり連携を取り合って暖かくサポートしていくことが大事と改めて勉強になった
・多動の子どもに制止、ではなく行動をよく見て理解し、環境設定することが大切。ついたてなど利用したい。壁面も自園で見直してみたい
・気がかりな子はもちろん、そうでない子にとっても集中できる場を作れるよう気をつけていきたいと思った
・話を聞きながら、保育をふりかえることができ、あらためてこうやって子どもを見ていこうと思った
・小学校に向けてよい保育、家庭との連携を密にしたい

【医療の関わりについて】
◎子どもにどんな困り感があるか、保育者・医療・保護者の立場からどのようにアプローチしていけばよいのか考えさせられた
◎幼児期の発達について医学的観点から具体的な話が聞けて参考になった
・医療と保育のつながりをあらためて大事にしないといけないと思った

【感覚統合の視点について】
・いつもなにげなくしている遊び、つなぎにしていることが優れた遊びだったんですね。小さい子の手遊びと思っていたが、復活して感覚を育てたい。手洗いや飲むことも再度見直して保育できるようにしたい
・感覚という視点から保育を考えたのは初めてだった。感覚過敏や鈍麻を抱える子どもであっても人を支えに感覚をつくっていける。感覚という機能までも人を支えに育っていくことに人は人によって育てられていくことを再認識した
◎困り感ではなく、本人の感じ方、とらえ方を理解していくことも重要であると感じた
◎固有覚という感覚について、その発達が不十分な子がいることを知った。
・手遊びをたくさんとりいれ、少しでも感覚面から手助けになれたらと思った
・園生活で手遊びや着替え等の日常動作をしながら少しずつ苦手なことを減らしてできることを増やしていけるといいなと思った
・感覚の過敏・鈍磨はあるが、現場で丁寧に個別対応できていないと感じさせられた。個人に応じて対応できるようにしていきたい
・日々の保育のなかで身近な環境について見直したりすることが少なくなってきているので目を向けていきたい
・その子が楽しいと思うこと、心地よいという感覚が大切で、無理強いすることは解決策ではない。それをわかってあげる観察力をしっかり養っていかなければならないと感じた
◎気がかりな子がより過ごしやすくわかりやすい園生活を送ることができるために教師の果たすべき役割が大きいことを改めて感じた。苦手な刺激を除去したり、理解して支援してあげるだけでも大きく違うと理解することができた

(4)附属幼稚園に対する印象の変化

講習前の事前アンケート（表2）で同園の印象を記述してもらっているので、講習終了時点で印象が変化したかどうかについて自由記述してもらった。表6は項目別にまとめたものである。◎は参観経験者である。

本学部附属幼稚園は、子どもが自分の興味関心から遊びを見つけ遊びこむなかで、幼稚園教育要領[5]の5領域（健康・人間関係・環境・言語・表現）を横断的に学びを積み重ねていく保育形態をとっている。そのために教師は遊びのなかでの子どもひとりひとりの育ち、集団の育ちを把握し、教師間で密に情報交換を行い、環境構成や子どもへの関わり方を日々工夫されている。

同園の保育の参観経験のある受講者2名はいずれも複数回の参観のなかで、同園の園児の様子、保育内容、環境構成や教師の関わり方について理解されており、講習前後での印象は大きくかわらない。

一方参観経験のない受講者は、受講者により印象が異なっている。

園児については、講習前、子どもが自由にのびのび遊んでいるという印象を持っている受講者もいれば、能力差がない、行儀がよい、入試があるので優秀な子どもが多いといった印象を持っている受講者もいる。しかし受講後には、自分が保育している子ども達と同じように様々なタイプの子どもがいることを認識するようになっている。

保育についても、設定保育（一斉保育）が中心という印象が、講習後には遊びを中心にした保育であり、遊びのなかの学びを重視していること、異年齢の関わりが多いこと等へ変化している。

教師については、講習前には研究熱心、指導案の書き方が優れているといった印象が記載されていたが、講習後は、より具体的な子どもの見方や関わり方への言及となった。

表6.　附属幼稚園に対する印象の変化

【園児について】 ・先生の話をよく聞くいい子が多いのではと思っていたが、いつも自分が目にしている同年齢の子ども達と一緒で元気な子もいればおとなしい子もいるし、集団からはずれていく子もいるんだな、ありのままを大切に保育されているのだろうと感じた ・3歳児クラスを見ていて、色々な子がいるんだと安心した ・服がドロドロになったりする遊びはあまりしないイメージだったが、砂場に水路を作ったり「こんな遊びをするんだ」と驚いた
【保育について】 ◎園児がいろんな場所で自分を出して遊んでいる以前からの印象はそのままである ・どろんこになりながら遊ぶのは意外だったが、身体全体で自然のなかで遊ぶのはとても大切なことだと思った ・「教育」という印象が強かったが、子どもの主体性を大切にしており、そのなかでの育ちが保障されていくイメージにがらりと変わった ・教育面が強いのかと思っていたがそうではなく、遊びのなかからの学びを大切にされていた ・遊びのなかに数をさりげなく入れていたりと子ども発信の学びがとても多く見られた ・一斉保育が多いと思っていたがそうではなかった ・もっと固いイメージがあったが、そうではなく、楽しく生活ができるよう工夫されていると感じた ・附属幼稚園についてほとんど何も知らなかったが、異年齢がかかわる時間がとても長いこと、部屋も開放的で同学年が一緒に行動できることがいいと思った
【保育環境について】 ◎色水広場や園庭をよい状態に保つことは目に見えない努力と苦労があると思うが、子ども達のために整えられていて素晴らしい ◎幼児の知的好奇心や興味関心を伸ばすことができると感じた ・保育室環境が保育しやすいと思う。部屋にトイレがあるのは3歳児にとってよい。トレーニングしやすい
【教師について】 ◎園児を暖かく見守り気持ちによりそう教師がいることも以前と変わらない ◎幼児が主体的に活動するために、幼児の遊びに見通しを持って関わり、先生方でたくさん話し合われて環境構成されていることがいつも伝わってくる ・子ども達の質問に教師はある程度答えたら正解は自分で考えさせるという対応は驚いた。最後まで答えずすーっといなくなる対応は勉強になった ・虫など自然に関しての知識が豊富であるところに関心した ・研究の柱をひとつ決めてそれに添って保育をすすめ、子どもを見ていくところはとてもすごいと感じた

(5)講習方法

本講習は、一日のなかで保育参観、グループ討議、講義、と多角的な学習方法を取り入れた。この方法についての感想や意見を自由記述で記載してもらった。10名中8名が記載していた。主な内容は表7のとおりである。◎は参観経験者である。

本講習は、ふようラウンドテーブルのプログラムに合わせた講習ではあるが、保育参観、グループ討議、講義という、見る、語る、聞くという受講者の五感を様々な方向から刺激することによる学習の相乗効果を期待したものである。

記述のあった8名はいずれも、参観とグループ討議、討議とグループ講義、参観とグループ討議と講義、というように複数の学習方法についてとりあげそれぞれの効果を述べており、今回の多角的な学習方法を取り入れたプログラムは概ね好評だったといえる。

グループ討議では、同園の研究テーマ「つながり合って遊ぶ子どもたち」の視点で行うことを保育参観前にラウンドテーブル参加者、講習受講者に伝えてあった。自分の見た「つながり」を伝え合うことから始めたので討議への参加がしやすかったこともグループ討議の評価に

つながったものと考えられる。

事前に園の研究に関する資料は送付していたが、指導案は当日配布となる。オリエンテーションで説明はしているが、保育参観の時間をなるべく多くとることを考えると当日の説明は必要最小限にとどめざるをえなかった。

表7.　講習方法

・多角的スタイルはよかった
・参観→グループ討議→講義で、学びもそれぞれにありよかった
◎一日いろんな内容について学ぶことができ有意義だった
◎他園参観の機会がないのでそれが一番魅力的だった
◎幼児の遊びの姿、教師の援助、様々な環境についてたっぷり参観できた
・参観ではいくつもの環境設定のなかで遊びこむ子どもの姿が見られて楽しく学びになった
・参観も見応えがあり、そのつながりでの討議も色々聞くことができ学びになった
・参観時間も十分あり、自由に参観でき、知りたい視点から参考になる見方ができてよかった
◎グループ討議は少人数でざっくばらんに保育について語り合うことができた。いろんな年齢や立場の人と話せたのが勉強になった
・同じ保育を見た参加者と語り合う場があるのは貴重で様々な視点からの感想を聞くことができた。同じ園で働く同僚とは違った考えや意見を聞くことができた
・受講者10名で不安だったが、助言者・協力者もいて意見交換でき内容もよかった
・グループ討議は担任に日頃の姿も合わせて聞くことができ、今日の姿プラスアルファの姿を想像できよかった
・事前資料をじっくり見ていなかったことと初めてだったのでどんなものか見えにくかったが繰り返し資料を見てようやく見えてきた。最初に説明が少しあるとさらによかった
・講義も違う方向からの見直しふりかえりができてよかった
・医療の視点からの講義も関心の高い部分なので勉強になった
・講義は今課題としている部分の参考となる内容でよかった
◎講義は幼児期の発達について知識を深めることができた
・講義がもう少し聞きたかった

5-4.　免許状更新講習受講者評価結果

教員免許状更新講習は、講習後に受講者による「免許状更新講習受講者評価書」の提出（無記名）が義務づけられている[6)]。

本講習における結果は図2のとおりである。3項目についてそれぞれ4段階評価であるが、3項目とも「あまり十分でない」「不十分」は選択されなかった。

また項目毎の自由記述は表8のとおりである。

平成24年度からの受講者評価は、6年間を通して「あまり十分でない」「不十分」は選択されていない[7)]。

運営面に関しては、幼稚園や大学の教務課職員に負うところが大きい。研究内容や指導案等の資料作成、グループ分け、講義場所の確保等は幼稚園に全面的に依頼している。大学の教務課には、事前資料送付や受講者の会場までの送迎の事前確認や対応等の配慮をいただいた。

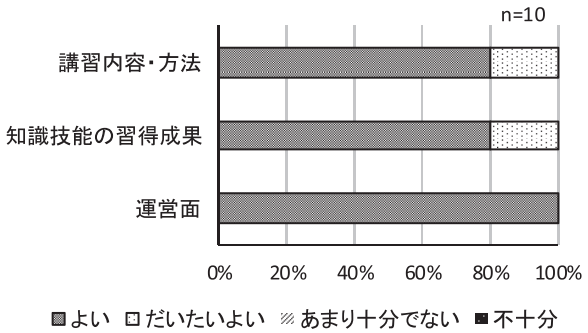

図2.　受講者評価結果

表8.　受講者評価書自由記述

【講習内容・方法】 ・附属幼稚園ならではの保育を見ることができた ・自園でも課題としている「つながり」がねらいだったこともあり興味深かった ・現場を見る機会を作ってくださり勉強になった
【講習を受講することによる知識・技能習得の成果】 ・「つながり」を意識した保育は初めてだったので自分も子ども主体の保育をしたいと思った ・小児科医から保育と違った観点での話を聞くことができ貴重な時間となった ・いろんな方の話を聞く機会があり、いろんな方面の知識が増えて実のある講習だった ・自園の課題をふりかえる良い機会となった
【講習の運営面】 ・様々なスタイルでの受講で、ひとつひとつ気持ちが切り替わってよかった ・丁寧な対応でわかりやすく勉強になった

6.　考察

附属幼稚園と連携した教員免許状更新講習は、受講者にとって、他者の保育を客観的に参観することで自らの保育をふりかえる機会、他園保育者や他職種とともに学び合う場、幼児期の発達を学び直す場となっていた。

本講習は、平成24度開始当初、受講者が幼児教育経験のない小学校以上の教諭が10名中9名、平成25年度も10名中4名だったこともあり、幼稚園での子どもの遊びを見るときのポイントを保育参観前に説明していた。グループ討議は活発であったが、附属幼稚園の保育についての感想や、小学校に入学してくる前段階の子ども達が予想以上に様々なことを考え行動していることの認識が中心となっていた。平成26年度以後の受講者は、ほぼ幼稚園、保育園の保育者だけとなったため、参観ポイントを伝える必要性はなくなった。また受講者は実際に保

育を行っているので、グループ討議は自園との比較、自分の保育のふりかえり、子どもが遊びのなかでどのようなことを学び、保育者がどのように関わるかといったより具体的な内容になっていった。

平成27年度までのグループ討議は受講者のみで実施していたが、平成28年度からの「ふようラウンドテーブル」開始にともない､ふようラウンドテーブル参加者、附属幼稚園職員、助言者・協力者、が加わったグループ構成になった。また保育参観前にグループ討議の主軸をどこに置くか事前に説明するようになった。討議のテーマを置くことでテーマにそって幼児期の発達を共有できるようになるとともに、同園職員による当日および当日にいたるまでの子どもの様子や教師の考えを聞けることになり、受講者の附属幼稚園への理解をさらに深めたものと考える。

講義は、実際に幼稚園や保育園で行われている遊びや教材を写真等を利用しながら医療的な観点からの解説を試みた。保育者間で無意識にされていることを異なる観点で見直すことであらためて自分の保育について考える機会になったと考える。

附属幼稚園にとっては、受講者の事前アンケート（表2）とレポート(4)附属幼稚園に対する印象の変化（表4）からもわかるように、保育参観や全体会は同園の保育および研究内容の周知の場となった。また上述のようにグループ討議がより具体的に同園の保育について伝える機会となっている。

本講習の実施が、研究園・モデル園としての研究内容周知の機会のひとつになると同時に、附属幼稚園の先生方それぞれにとっても、今後の保育や研究内容に寄与するものであれば、より本講習の実施意義が高まると考える。グループ討議で、受講者から質問を受けることにより附属幼稚園の先生があらためて自園の保育や研究を見直すきっかけになる可能性があるだろうし、受講者レポートの分析を提示することで、それぞれの保育のふりかえるきっかけになるかもしれない。この点については今後の課題である。

平成24年の改正認定こども園法[8]において「保育教諭等」は、「幼稚園教諭免許状」と「保育士資格」の両方の免許・資格を有することを原則とするとされた。今後保育園が幼保連携型認定こども園に移行していく過程で休眠状態の幼稚園教諭免許状を更新しなければならず、免許状更新講習受講者の増加が想定される[9]。現在の講習は講義場所や受け入れ人数の限界もあり定員を10名程度にせざるをえず、本講習の形態で受講生増加への対応は困難である。受講者にとっても附属幼稚園にとっても質の高い教員免許状更新講習を企画していくにはさらに工夫が必要である。

謝辞

本講習に参加された受講者の方々、本講習実施に多大なご協力いただきました福井大学教育学部附属幼稚園の先生方、そして福井大学学務部教務課教育実習・教員免許係の皆様に感謝申し上げます。

注釈

(注1) 毎年1回土曜日に開催される幼児教育研究集会（または公開保育）とは別に平日に開催される会。公開保育で見えた幼児の姿をもとに参加者が日々の保育についてふりかえり語り合う機会を設定している。平成28年度から年1回実施されている。研究集会が参加者100名以上であるのに対し、ふようラウンドテーブルは30名弱である。主な参加者は保育士、幼稚園教諭、保育教諭である。

引用文献

1）文部科学省　教育職員免許法　平成19年改正
2）教員免許管理システム運営管理協議会　http://www.kyoin-menkyo.jp/menkyo-pubsys-web/pubuser/ 2017.11.27アクセス
3）福井大学教育学部附属幼稚園研究紀要24　2017.11.
4）福井大学教育学部附属幼稚園ふようラウンドテーブル配付資料　2017.11.
5）文部科学省　幼稚園教育要領　平成20年3月告示
6）文部科学省　免許状更新講習の認定申請等要領 2016.1.
7）竹内惠子　平成27年度日本教育大学協会研究集会発表概要集　2015：pp106-107
8）文部科学省　就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律の一部を改正する法律（改正認定こども園法）　平成24年法律第66号
9）文部科学省初等中等教育局教職員課　教員免許更新制における免許状更新講習の受講及び円滑な手続き等について（事務連絡）　平成29年7月31日

Teaching license renewal course in cooperation with the attached kindergarten
-Significance and problem from the questionnaire and report by the participants-

Keiko TAKEUCHI

Key words：Teaching license renewal course, Attached kindergarten, Cooperation, kindergarten teacher